

新元号 令和の出典と解釈 2

2680 地区 PDG 田中 毅

新元号の出典は「古事記」だと言われている。

天平二年正月十三日（現在の西暦 730 年 2 月）に、大宰師の大伴旅人の家に、国司や高官を招いて梅花の宴を開き、梅の花の歌、三十二首を詠んだ。

令和は、その歌会の冒頭に述べられた序文から引用したものである。

初春令月、氣淑風和、梅披鏡前之粉、蘭薰珮後之香。加以、曙嶺移雲、松掛羅而傾蓋、夕岫結霧、鳥封穀而迷林。庭舞新蝶、空歸故鴈。於是蓋天坐地、促膝飛觴。忘言一室之裏、開衿煙霞之外。淡然自放、快然自足。若非翰苑、何以瀆情。詩紀落梅之篇。古今夫何異矣。宜賦園梅聊成短詠。

解説文（日本語）

初春の**令**月にして、氣淑く**風和**ぎ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫す。

加之、曙の嶺に雲移り、松は羅を掛けて蓋を傾け、夕の岫に霧結び、鳥はうすものに封められて林に迷ふ。庭には新蝶舞ひ、空には故雁歸る。

ここに天を蓋とし、地を座とし、膝を促け觴を飛ばす。言を一室の裏に忘れ、衿を煙霞の外に開く。淡然と自ら放にし、快然と自ら足る。若し翰苑にあらざれば、何を以ちてか情を述べむ。詩に落梅の篇を紀す。古と今とそれ何そ異ならむ。宜しく園の梅を賦して聊かに短詠を成すべし。

私流に現代文に訳せば、次のようになる。

初春の麗しい季節であり、空気は爽やかで、風は穏やかである。梅は鏡の前の白粉をつけた美女のように艶やかで、蘭は全身から高貴な香を漂わせている。

更に、明け方の嶺には雲が漂い、松には薄絹を纏ったような雲がたなびき、夕刻には濃い霧が山の窪み一面に沸いて、鳥がその霧に閉じ込められて林に帰ることができない。庭には蝶が舞い、空には年を越した雁が故郷を目指して飛んでいる。

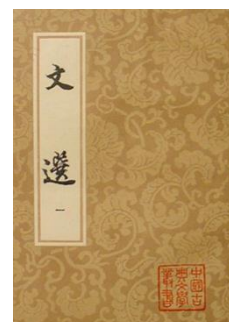
天を仰ぎ見、地に座って、膝を近づけ酒を交わす。無駄な言葉は必要とせず、胸襟を開きあい、淡然と自らの心のままに振る舞い、お互いが快く満ち足りている。これを文章で表すとしたら、その心をどのように表現したらよいのだろうか。古来多くの梅の詩が詠まれているが、昔と現在の詩どれほどの違いがあるのだろうか。この園の梅にちなんだ詩を詠もうではないか。

政府も、元号の考案者も、出典は「古事記」であると説明しているにも関わらず、親中国派と思われる某テレビ局が、出典は中国であると主張した。

中国の梁王朝（502～557）に皇太子の昭明太子によって編纂された「文選 もんぜん」にも、**令和**が使われているという、異論であった。

「文選」は、奈良時代の貴族の教養として、広く読まれていたため、古事記の詩の中に引用された可能性も否定できない。

そこで、「文選」を詳しく調べると、張衡が詠んだ「帰田賦」であることが判明し



た。

原文（漢文）

於是仲春令月，時和氣清；原隰鬱茂，百草滋榮。王雎鼓翼，倉庚哀鳴；交頸頡頏，關關嚶嚶。於焉逍遙，聊以娛情。

解説文（漢文）

正是仲春二月，氣候溫和，天氣晴朗。高原與低地，樹木枝葉茂密，雜草滋長。魚鷹在水面張翼低飛，黃鶯在枝頭婉轉歌唱。河面鴛鴦交頸，空中群鳥飛翔。鳴聲吱喳，美妙動聽。逍遙在這原野的春光之中，令我心情歡暢。

解説文を参考にした、いささか漢文には造詣深き、我流の解釈は次の通りである。

頃は春も半ばの二月、氣候温和にして天氣晴朗なり。小高き丘にも、広がる野にも、木々は鬱蒼と生い繁り、野原を埋め尽くす草葉は緑濃し。

魚を求める鷹は翼を広げて水面をかすめ飛び、枝に止まりし黄鶯は美しき声で囀る。

川面には鴨が行き交い、空には鳥の群れが飛び交う。

妙なる動きと音色が響き亘り、春の光の中で遙か遠くの野山に伝わり、我が心も喜びに満つ。

結論

解説文によれば、令月を麗しい月とは訳さず、睦月（一月）、弥生（三月）と同様に旧暦二月を表す名詞の熟語と訳しており、この場合、令の文字そのものは意味を持たないことになる。文法上では片や名詞熟語の片割れ、片や形容詞であり、単に近い距離に並んでいるだけである。

二つの文字に、何らかの意味を込めたり、韻を踏んだりするならいざ知らず、漢字のみで書かれている中国の古い文献を検索すれば、令と和を含んだ文章は、数限りなく見つけることができる。この論法で通せば、全ての漢字文章は、出典、中国となる。

しかし、この新元号の真意を理解しようとするれば、梅の花を介して詩を詠む宴を催すという深い意味を持たせた令と和という形容詞の組み合わせは、日本文学の原点である古事記のみしか成し得ない表現である。

従って、令と和の出典は「文選」であるという説は、学なき者のこじつけであって、この素晴らしき元号の出典は「古事記」であるというのが、私の結論である。